

『小児POCUSをメモワールとして語る』

兵庫県立こども病院 救急科
竹井寛和

僕は救急外来を主に働く小児救急医です。普段はけいれんや呼吸障害などの内因系疾患以外に、外傷や中毒などの初期診療も守備範囲としています。そんな僕が15年ちょっとのキャリア（まだたった15年です。偉そうですみません）の中で、運よく出会ったのがPOCUSでした。

POCUSとはpoint-of-care ultrasonographyを示す言葉で、この10余年で各領域にその意義が浸透してきました。NEJMによると、POCUSは” the acquisition, interpretation, and immediate clinical integration of ultrasonographic imaging performed by a treating clinician at the patient’s bedside rather than by a radiologist or cardiologist.” と定義され、まさに現場の臨床医によって診療の意思決定に使用される手段の一つです。そのclinicianとは専門家を指しているわけではなく、エコーの技術を習得しようともがいている臨床医その人であり、僕自身もその一人でした。

僕はPOCUSに勇気をもらい、周囲の方々の助けもあって少しずつ小児救急領域における自分ならではのPOCUSを確立させていきました。小児医療とエコーとの親和性が高いのは言うまでもありませんが、小児救急とエコーとの親和性はまた格別です。

一方、海外では小児救急領域のPOCUSのエビデンスが蓄積されていき、欧米を中心に小児救急の教育カリキュラム案が発表されています。今回の講演ではそんな小児救急のPOCUSの歴史を紐解きながら、POCUSに魅了された一人の小児救急医が歩んできた轍を共有させていただきます。

また、近年僕が感じているPOCUSの秘めたる力も（うまく言語化できるかわからないですが）ご紹介したいと思っています。なんとかPOCUSへの想いを自身のメモワール（回想録）に込めて、若手皆様の心に届く講演にしたいと思います。

【略歴】

2008年山梨大学医学部卒。横浜労災病院、北九州市立八幡病院で小児科専門研修後、2014年から東京都立小児総合医療センター救命救急科フェロー、同医員を経て、2020年から現職。小児科学会専門医・指導医、救急医学会救急専門医。